

# ことばだより

Vol.8

2022（令和4）年7月

連載

## 学習評価の鍵は“指導との一体化”

### 第2回：「読むこと」の学習評価

大妻女子大学 教授  
かばやまとしろう  
樺山敏郎



国語科の〔思考力、判断力、表現力等〕の3領域の学習評価に共通していることは、2学年ごとに配置されている指導事項を言語活動を通して指導することです。そのため、言語活動を遂行する中に子どもたちが思考したり判断したり表現したりする場を確実に用意して、資質・能力がどの程度身についているかを評価していくことになります。

#### 「読むこと」の言語活動は機能していますか？

資質・能力の育成に向けて指導事項を指導するためには、言語活動を機能させるという認識を高めることが重要です。言語活動を行う目的が曖昧であったり、指導事項と言語活動の対応関係がズレていたりすると、評価しようとする資質・能力が不明確になったり、うまく評価できなくなったりするものです。次は、小学校学習指導要領の国語「読むこと」の言語活動の特徴を整理したものです。

- ①主として説明的な文章を読んで、分かったことや考えたことを表現する言語活動
- ②主として文学的な文章を読んで、内容を説明したり考えたことなどを伝え合ったりする言語活動
- ③主として学校図書館などを利用し、本などから情報を得て活用する言語活動

このように「読むこと」の言語活動は3系統に分けられています。説明的な文章には、説明（事物）、記録、報告、解説などの文章があります。文学的な文章は、詩、物語、伝記などを対象としています。また、学校図書館での読書対象としては、図鑑や科学的なことについて書いた本、事典、新聞などを例示しています。取り上げる読書対象を広げ、豊かに

言語活動を展開することが求められています。例示されている言語活動は、一教材の読解に収まらずに教材の多読や表現までを視野に入れています。子どもにとって意味ある言語活動が設定されることによってそのパフォーマンスは活性化され、それを学習評価につなげることができます。

#### 「読むこと」の学習評価のポイントは？！

「読むこと」の学習評価においては、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」のそれぞれについての評価規準及び評価方法には差異が生じます。「構造と内容の把握」を評価する際、「叙述に基づいて適切に把握しているか」については、取り出すキーワードやキーセンテンスが重視されます。「精査・解釈」については書かれていることのみならず、書かれていないことまでを評価する場合があります。子ども一人一人の解釈の幅に目を向けて評価することが大切です。「考えの形成」は、そのよりどころとして「精査・解釈」を重視し、自分の既存の知識やさまざまな体験とどのように結びつけているかを見取る必要があります。「共有」においては、独善的・恣意的な読みを内省したり、他者の読み方や感じ方に触れて自分の考えを広げたりしているかといった点を含めた学習評価が重要です。単に感想の交流ではなく、これまでの学習過程を含めて自身の読みを再構成し吟味し意味づけるといった、自己省察を重視するようにします。

「読むこと」の学習評価は指導事項を厳選し、B規準（おおむね満足できる状況）の子どもの具体的な姿をクリアに描く必要があります。

次号（9月発行予定）連載第3回『「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習評価』に続く。



## 1. 戦前の「大造じいさんと雁」の特徴

「大造爺さんと雁」が初めて掲載されたのは、『少年倶楽部』（昭和16年11月号、大日本雄弁会講談社発行）でした。『少年倶楽部』は、小学校高学年から中学生を読者対象とし、当時の少年たちに、圧倒的な人気を誇る少年雑誌でした。そのため、『少年倶楽部』の「大造爺さんと雁」は、「餌」「鰻釣針」「罠」など、漢字表記の多い作品となっています。



▲初出時の「大造爺さんと雁」

『少年倶楽部』に初めて椋作品が掲載されたのは、昭和13年10月号掲載の「山の太郎熊」でした。以降、昭和18年11月号掲載の「三郎と白い鷺鳥」まで、15作品が『少年倶楽部』に掲載されています。

『少年倶楽部』に掲載された「大造爺さんと雁」は常体で表記され、「まえがき」は付されていません。皆さんが使用する教育出版の教材は、「まえがき」のない、常体表記の「大造じいさんとがん」であり、初出の作品を底本にしていることがわかります。

次に、「大造爺さんと雁」が掲載されたのは、『動物ども』でした。『動物ども』は、『少年倶楽部』掲載の11作品と、書き下ろしの4作品をまとめて出版した動物物語集であり、椋にとって、初めての少年向け、単行本の出版でした。『動物ども』は、昭和18年5月10日に初版6千部発行され、同年12月には、再版1万部が出版されました。また、文部省推薦図書になった本でもありました。

初めての少年向けの本、『動物ども』の出版にあたり、椋は、原稿を清書したといわれています。椋は、この本をどのような本にし、どのように読者をひきつけるかなど、編集にそうとう力を入れたにちがいありません。『動物ども』の動物物語は、全て敬体で統一され、

しかも、巻頭に置かれた物語は、「まえがき」を付した「大造爺さんと雁」でした。

この「まえがき」には、大造爺さんが「なかなか話上手の人で」あり、「それからそれと愉快な狩の話をしてくれ」る人であったと紹介されます。また、「その折の話を土臺として、この物語を書いてみました。」「山家の爐ばたを想像しながら、この物語をお読み下さい。」のように、椋は、大造爺さんの語り（「話し上手」「愉快な狩の話」）を強く意識したにちがいありません。

「山家の爐ばたを……」は、椋の幼少期、いろりにとろとろと火が燃える部屋で、祖母からたくさんの昔話を聞いた体験と共通します。

椋は、読者に語り聞かせる物語の構成や文体、言葉をかえれば、「語りの物語」を強く意識し、『動物ども』を編集したのではないかと推察します。

## 2. 戦後の「大造じいさんとガン（がん）」の特徴

戦後初めて出版された、椋の動物物語集は、『動物のふしぎ』（昭和22年3月、光文社）でした。この本は、戦後の物資不足の中での出版のためか、『動物ども』収録の15作品を9作品に減らして出版された本で、巻頭を飾る動物物語は、「山へ歸る」になっています。

『動物のふしぎ』に収録された「大造じいさんとガン」には、「まえがき」があり、「今年も、残雪はガンの群れをひきいて沼地にやって来ました。／残雪というのは、一羽のガンにつけられた名まえです。」のように、戦前の作品と比べて漢字使用を減らした作品になっています。また、動物名は全て片仮名を使用していること、旧仮名遣いや旧字が残っているという特徴もあります。

4番めに「大造じいさんとガン」が載せられたのは、



『動物小説 山の大将』（昭和31年11月、講談社）でした。この本では、「大造じいさんとがん」という題がつけられ、「まえがき」はなくなりました。

「ことしも、残雪は、がんのむれをひきいて、ぬま地にやってきました。／残雪というのは、一わのがんにつけられた名まえです。」のように、『動物のふしぎ』より更に漢字使用が減り平仮名の多い物語になっています。

戦後に出版された二冊の本に収録されている「大造じいさんとガン（がん）」は、低年齢の読者でも読むことができることを意図した作品であるといっているのではないのでしょうか。



### 3. 「まえがき」と物語の中の 大造じいさんは、同一人物？

「まえがき」がないと、大造じいさんは、がんの習性をよく知る熟練の老狩人大造じいさんとして読み進められます。動物の習性を熟知している老狩人大造じいさんだからこそ、自分の身を顧みず<sup>はやぶさ</sup>隼に体当たりし、仲間を救おうとする残雪に共感し、残雪に向けた鉄砲を下ろすのです。そして、「強く心を打たれて、ただの鳥に対してのような気がしなかった」という敬意を抱くのです。

では、「まえがき」がつくとどうでしょうか。「まえがき」の大造じいさんと物語の中の大造じいさんが、同じ名前「大造じいさん」のため、「まえがき」と物語の中の大造じいさんは、同一人物だという先入観が生まれます。この先入観にとらわれて「大造じいさんとがん」を読む読者は、「まえがき」の叙述、72歳の老狩人が話した、今から35・6年も前のがん狩りの話の部分を読み、物語の中の大造じいさんの年齢を、36・37歳だ、とイメージして読み進めるのです。

このような読みでいいのでしょうか。もう一度「まえがき」に着目しましょう。

そこには、「わたしは、その折の話を土台として、この物語を書いてみました。」とあります。

「大造じいさんとがん」は、栗野岳<sup>くりのだけ</sup>のふもとに住む、72歳の老狩人大造じいさんの話した「今から三十五、六年も前、まだ栗野岳のふもとのぬま地に、ガンがさかんに来たころの、ガンがりの話」を「土台として」創作された物語であり、物語に登場する大造じいさんは、作者が創り出した大造じいさんであることがわかります。物語の中の大造じいさんは、「まえがき」の栗野岳のふもとに住む老狩人大造じいさんと重なりながらも、同一人物ではない、老狩人大造じいさんなのです。



### 4. 大造じいさんの顔つきは、 「はればれ」か「ほればれ」か

先に挙げた雑誌、単行本に加え、『新日本少年少女文学全集 32 椋鳩十集』（昭和34年3月、ポプラ社）、『少年少女日本文学 22 椋鳩十名作集』（昭和39年4月、偕成社）も取り上げ、北へ飛び去る残雪を見る大造じいさんの顔つきが「はればれ」か「ほればれ」かについて考えてみましょう。

初出の『少年倶楽部』と『動物ども』では、「晴れ晴れとした顔つき」と表現されています。しかし、『動物のふしぎ』では、「ほればれとした顔つき」に変わり、『動物小説 山の大将』では、「はればれとした顔つき」に戻り、『新日本少年少女文学全集 32 椋鳩十集』『少年少女日本文学 22 椋鳩十名作集』では、ともに「ほればれとした顔つき」となっています。

初出からみると「晴れ晴れ」→「ほればれ」→「はればれ」→「ほればれ」と表現が変更されています。「はればれ」「ほればれ」の表現の相違については、椋の意図があると思われそうですが、ここでは、問題を提起し、今後の研究を待ちたいと思います。



### 5. 終わりに

「大造じいさんとがん」の表現の変遷について、述べてきました。初出から六つのテキストを比べると「大造じいさんとがん」は、表現の異同が多い作品だということがわかると思います。

この表現の違いに着目し、授業を構想してみよう。

例えば、「まえがき」の有無、文末表現が常体と敬体とでは、物語の印象がどう変わるか。また、大造じいさんの「はればれとした顔つき」が、「ほればれとした顔つき」になると、大造じいさんと残雪の関係はどう変化するか、などについて考え合うこともできそうです。先生と子どもたちが織りなす「大造じいさんとがん」の新しい展開を楽しみにしています。

【書影提供】

椋鳩十記念館

【主な参考文献】

『椋鳩十文学の研究』阿部真人 大日本図書

『椋鳩十研究—戦時下の軌跡』鈴木啓司 菁柿堂

『椋鳩十の本 補巻一・二』たかしよいち 理論社

# 教室で楽しむ ことば遊び

「ことば遊び」を活用した言葉の学習の実践を紹介!!

## 第二回 五十音遊び（前半）

むかいよしひと  
向井吉人（元東京都小学校教員）

ことばを駆使したパフォーマーである、はせみつこさんが考案した「あいうえお体操」を活用した授業。2回ほど「あいうえお体操」のDVDを視聴してもらった1年生の教室での試みです。

### 1. 五十音表をつくる

始業の挨拶のあと、やώρα黒板に「あいうえお」と書いて、「さあ、声に出して読んでみましょう!」と授業を始めます。ごく普通に声をそろえて読んでくれます。「いい声だねえ、でももっと違う読み方をしてみようか!」と促して、「あいうえお」を「あ・い・う・え・お」「あい・うえお」などと、私がさまざまに速さやくぎり方で読んで、全員でまねっこしてもらいます。ここで「あいうえお体操」の声の出し方、例えば「あーいーうえ、おーおー」をさりげなく取り入れます。でも、大半がオリジナルで、その時々のおいづきです。

「かきくけいこ、むしゃむしゃむしゃ」で柿を食べるまねをしたり、「たちち・つー・てと」と立ち上がって座る動作をしたりもします。「はひふへほ」は一つ一つの音が笑い声になるのですが、「ふふふ」や「へへへ」などは大きな声にはなりにくいことがわかります。「あいうえお体操」の「はっ、ひー、ふへほ」という読み方は、その点秀逸です。

こんな調子で、一行ずつ「ん」まで、書いては読み・読んで書きを繰り返します。

数行進めてから趣向を変えて、「たちつてと・とてつちた」のように反対読みを入れ、早口言葉ふうの読み方をすることもできます。全員で読んだあと、一人で挑戦してもらいましょう。

1年生ではすらすらとは読めず、つかかかったり、ずれてしまったりなどします。しかし、それがおもしろく、笑いあり、拍手あり、楽しく遊べます。

とはいえ、後半、「まみむめも」あたりになると繰り返しに飽きてきますので、読む回数を減らしながら、さっさと「ん」までを書き、次の「あいうえお体操」へと進めました。

### 2. 「あいうえお体操」

さっそく大型テレビに映像を映し出して、始めます。3回めでしたが、大喜びで立ち上がり、ぎこちない動きでしたが、「たちつてと」あたりから声も出ていました。「はひふへほ」がお化け、「やいゆえよ」がケンカ、「らりりれろ」がヘリコプターの動き。よほど楽しいのでしょうか、「最初から……」の声もあがります。



次号（9月発行予定）に続く。

次号では五十音遊び（後半）を紹介予定。

今回の実践で紹介した「あいうえお体操」（作詞・振付：波瀬満子、作曲：坪能克裕、編曲：谷川賢作、出演：うねもとしほ他）については、下記 URL をご覧ください。

<http://ulipo-hasse.com/>



### 本誌の デザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさねの色目」（平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩）をイメージした配色を用いています。今号では、夏のかさねの色目の中から、野山の茂みに咲き匂う姫百合の色を表わした「百合」を選びました。ぜひ次号のデザインもご覧くださいますと幸いに存じます。

※「かさねの色目」の組み合わせには、諸説あります。

小学国語通信 ことばだより Vol.8 2022（令和4）年7月発行

教育出版株式会社 編集局 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFT ビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）